研究（その３）

あるべき姿を求める歴史学習の創造
ー歴史的分野「なぜ，日本人は再び戦争へと向かったのか」の実践よりー

（実践者）宮本　真人

１　研究テーマ設定の理由

「過去」のできごとを扱う歴史的分野の学習において，「現在」と「将来」の二つの視点を軸にして論じられる「持続可能な社会」の形成に資するためには，「過去の事実の分析や解釈を通して現代の社会の特色や現在の自分の立ち位置を認識し，それを踏まえて未来社会を予見し構想できる力」が育つ授業展開が重要だと考える。このためには，推論によって歴史的事象や問題の背景を思考し，それを基にして，当時の社会的な問題や課題の最も有効な解決策や目的を実現するための最も合理的な手段・方法を選択・決定するなど，当時の「あるべき姿」について社会的な判断を求める学習を積み重ねさせる必要があると考えた。このような学習においては，論理的に思考し表現する生徒同士の学び合いを通してこそ，より多面的・多角的に捉えさせることができ，そのことが「よりよさ」を志向することにつながると考える。以上のような，過去を映し鏡に，現代社会の特色が分かり，持続可能なよりよい社会に向けた構想ができることを想定した学習の積み重ねにより，教科領域研究テーマに掲げた力を育成できると考え，個人研究テーマを設定した。

２　研究の内容及び方法

本年次は，次の「研究の内容及び方法」により，研究テーマの具現化に迫ることとした。

（Ⅰ）問題解決的な学習の充実
　ア　持続可能な社会づくりに活きる学習内容の研究・吟味
　イ　知識や概念を持続可能な社会の形成に資するものに拡大させる学習指導方法の工夫
（Ⅱ）「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実
　ア　すべての生徒が学び合える効果的な学習形態の工夫
　イ　他者からの学びを促進する学習指導方法の工夫
（Ⅲ）資質・能力を高める評価の工夫
　ア　逆向き設計論に基づく指導計画や評価計画の立案
　イ　単元の学びを包括できるパフォーマンス課題及びルーブリックの検討

３　研究の実際

(1) 生徒の実態

本実践対象学級の生徒（78名）は，前単元のまとめの問いである「日本の民主主義（大正デモクラシー）はどのように高まったのか」について，大正時代の光と影の部分を捉えながら，根拠を挙げて論理的に記述できた生徒が65名いた。残り13名は一面的な記述であったり，結論と根拠が食い違っていたりしたものの，他者との学び合いを通して，最終的には論理的かつ多面的・多角的に考察し表現することができた。しかし，本単元前に「国際協調の時代であり，デモクラシーの風潮が高まっていたにもかかわらず，なぜ，日本人は，再び戦争に向かったのか（予想)」では，小学校で学習した日華事変，日中戦争，太平洋戦争などの言葉を知っているものの，それらから予想を構成し，その根拠をある程度論理的に表現できた生徒は８名しかいなかった。ここから分かることは，個別の知識がまとまりのある真の理解には結び付いていない生徒の状況と，知識が不足していたり，事象間のつながりを明確に捉えられていなかったりする場合，歴史的事象の原因と結果について「論理的に思考し表現する」ことはできないということである。以上から本実践では，個別の事象について表面的な事実を知ることのみに終始しないよう留意することが大切だと考えた。また，生徒は全員，現代のテロや紛争を肯定的に捉えることはなく，国際平和の実現に努めることの大切さを認識し

ていた。だからこそ，「なぜ，日本人は戦争に向かったのか」や「戦争を回避するためにはどうすればよかったのか」の追究では，感情論ではなく，当時の社会状況を科学的に追究させ，思考の過程や結果を生徒同士が論理的に表現し合う中で，見方や考え方を広げ深めさせなければならないと考えた。

(2) 論理的に思考し表現する力を高めるための工夫

「事象や問題の背景を熟考（時間的・空間的な視点をもって，多面的・多角的に考察）し，自分の意見や考えをもち表現する力」（本校社会科で捉えた論理的に思考し表現する力）を発揮させ高めるために，次の点に留意した。

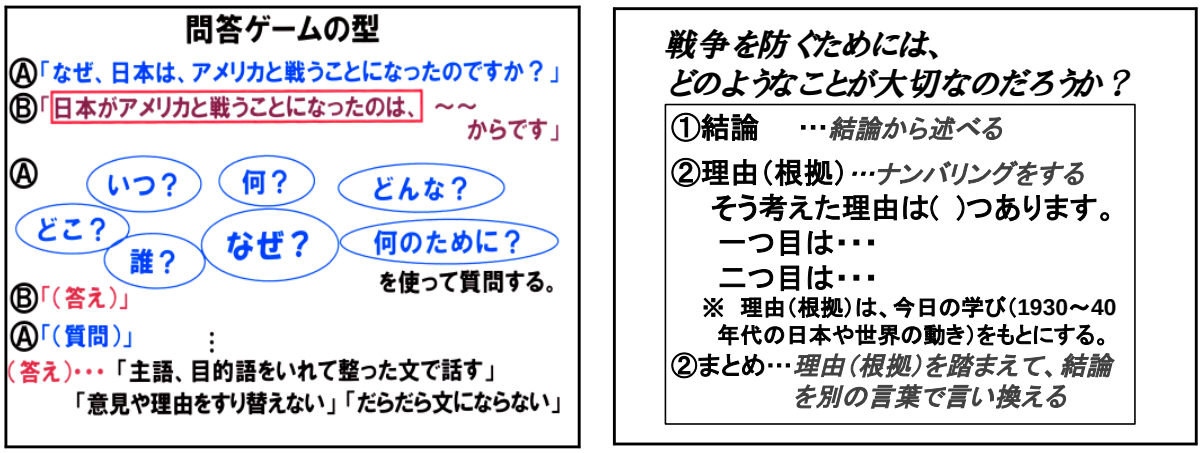
ア 「熟考」できる質の高い問いの設定

本単元では次のように，単元を貫く学習問題を設定し，その解決に迫るために理解深化課題（Ｐ４(イ）イ参照）を次のように設定した。

○ 本単元を貫く学習問題
「なぜ，日本人は再び戦争に向かったのか」
○ 本単元各次での理解深化課題
第一次：「なぜ，世界恐慌で各国の対応は異なったのだろうか。」
第二次：「なぜ，日本と中国の関係は悪化したのだろうか。」
第三次：「太平洋戦争へと向かうターニングポイントとなったできごとは何だろうか。」
「なぜ，太平洋戦争が『明るい』や『爽やかだ』と表現されたのだろう」

イ 言語技術教育の手法を活用した思考・表現の場面の設定

生徒同士の学び合いが，「論理的に思考し表現し合う学び合い」となり，一人一人の見方や考え方を効果的，効率的に広げ深めさせられるよう，スピーチや問答ゲームの「型」（出典：つくば言語技術教育研究所）を授業で随所に活用して思考・表現させた。併せて，ワークシートやホワイトボードの活用方法を工夫することにより，互いの思考を可視化したうえで，外的リソース（頭の外の資源）を活用して，思考を深めさせたり，他者に効果的に表現する方略について工夫した。



言語技術教育の「型」を生かした思考・表現の例（本実践第６時の例）

（出典：つくば言語技術教育研究所）

(3) 授業の実際

ア 指導の実際

（ア）概 要

単 元 第２次世界大戦と日本－なぜ，日本人は再び戦争へと向かったのか－（全10時間）

単元目標

軍部の台頭から戦争までの経過と， 大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解し，国際協調と国際平和の実現が大切であることに気付く。

本質的な問い

なぜ，戦争は起こるのか。どうすれば戦争は防げるのか。

永続的な理解

第二次世界大戦は，ベルサイユ体制のもとでの植民地支配の継続，民族至上主義による多民族の迫害，世界恐慌からくる経済的社会不安，仮想敵国を想定した同盟や条約が複雑に結びついて起こり，人類全体に惨禍を及ぼした。それは現代の国際関係にも影響を及ぼしている。私たちは，国際協調と国際平和の実現を誠実に希求し，全世界の人々が等しく恐怖と欠乏から免れた持続可能な社会の実現に主体的に参画することが大切である。

評価計画

評価目標	評価方法
①　第二次世界大戦による惨禍など，近代の歴史的事象に対する関心を高め，学習問題「日本人はなぜ再び戦争に向かったか」を意欲的に追求しようとし，国際協調の大切さを考えようとする。（関心・意欲・態度）	**◎パフォーマンス課題** ・あなたは平和を守るための調査や研究をしている政治学者です。20世紀に入り色々なところで戦争が起こる世になりました。第一次世界大戦，第二次世界大戦と規模が大きく犠牲も多く出た二度の世界大戦が起こったため，世界に向けて，「なぜ，戦争は起きるのか？ どうすれば防げるのか？」について提言するレポートを作成することになりました。国際シンポジウムのパネリストとして意見交換した上で，提言レポートをＢ４・１枚にまとめなさい。（①②③） ○ワークシート（①②③） ○ペーパーテスト（③④）
②　学習した内容を活用し，その比較や関連付け，総合などを通して，軍部の台頭から戦争までの経過や平和な社会を構築するための大切な事柄について多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。（思考・判断・表現）	
③　学習問題やパフォーマンス課題の解決に関して，収集した資料から有用な情報を適切に選択して，読み取ったり図表などにまとめたりしている。（資料活用）	
④　軍部の台頭から戦争までの経過と，大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解し，その知識を身に付けている。（知識・理解）	

指導計画（全10時間）

次	学習内容	評価規準	時数
1	各国の世界恐慌への対応 ○アメリカの動き ○ブロック経済とファシズム	◇なぜ，世界が再び戦争に向かったのかについて興味をもち，その背景を捉えようとする意欲が高まっている。（関心・意欲） ◇欧米諸国では，世界恐慌に対してどのような政策がとられたかを調べ，その問題点をまとめている。（資料活用）	2
2	日本の中国侵略 ○行き詰まる政党政治 ○日本の中国侵略 ○日中戦争	◇日中戦争開戦に至る経緯について理解している。（知識・理解） ◇日中戦争が中国や朝鮮，日本の人々にどのような影響を及ぼしたかについて調べ，まとめている。（資料活用）	2
3	第二次世界大戦のはじまり ○第二次世界大戦 ○太平洋戦争 ○戦時下のくらし ○戦争の終結	◇第二次世界大戦や太平洋戦争の原因や経過について理解している。（知識・理解） ◇日米開戦までの経過を振り返り，戦争を回避できた時点を自分なりに判断し，その理由を表現している。（思考・判断・表現） ◇戦争による国民生活の変化や戦争が現代に及ぼす影響などを踏まえ，戦争反対を訴えるスピーチ原稿を作成している。（資料活用）（関心・意欲・態度） ◇学習問題を多面的・多角的に考察し，その過程や成果を適切に表現している。（思考・判断・表現）	4
4	パフォーマンス課題 ○課題追求 ○模擬国際シンポジウム	◇模擬国際シンポジウムで，説得力のあるスピーチを表現している。（関心・意欲・態度）（思考・判断・表現） ◇パフォーマンス課題を意欲的に追究し，多面的・多角的に考察して，根拠を基に資料をまとめている。（関心・意欲）（思考・判断・表現）（資料活用）	2

（イ）本単元における指導と評価の工夫

（Ⅰ）問題解決的な学習の充実

ア　持続可能な社会づくりに活きる学習内容の研究・吟味

戦後70年を超えた現在，若い世代ほど過去の戦争の歴史について，自分なりに納得のいく認識をもち，「継承すべき戦争の責任」を課しながら世界と接していくことが求められる。戦争に至る経緯，その時期に日本が歩んだ道についての実感を獲得することは，次代の国際社会を担う生徒にとって不可欠なものであると言える。また，戦争について学習することは，平和で民主的な国家・社会の形成者として「よりよい社会」を構想し行動できる人間を育てるために最も重要な要素であると言える。特に市民を含む数千万人の犠牲者を出したと言われる第二次世界大戦は，人類史上最も悲惨な戦争であり，平和を希求し，民主的な「よりよい社会」を創造する態度を育てるためにも，学ぶ意義は極めて大きい。本単元は，ナチスドイツの侵略から始まる。日本は軍部の台頭や日中戦争の泥沼化からドイツと同盟を結ぶことに活路を求め，米英と対立を深め最終的に太平洋戦争開戦，原爆投下，敗戦へと歩んでいく。本単元では，この歴史的経緯を「なぜ，日本人は，再び戦争へと向かったのか」の学習問題のもとに理解させようと考えた。また，「戦争を回避するためには日本はどうすればよかったのか」を思考させることにより，現在及び将来の「よりよさ」を構想することにつながり，教科領域研究テーマの具現化に資することができると考え単元構想を立てた。

イ　知識や概念を持続可能な社会の形成に資するものに拡大させる学習指導方法の工夫

本単元の目標を達成するためには，大正デモクラシーの風潮が盛り上がっていた我が国が，再び戦争に向かった要因の究明に向けた課題意識を高め，主体的に追求しながら，実感を伴った理解に導く必要がある。そこで，この時代に生きた人物の思いや考えを引用しながら，単元の学びを構成した。また，毎時の学習は，より深い理解を得られるよう「教えて考えさせる授業」（市川伸一氏）で提唱される学習過程を参考にし，当時の社会の状況を捉えるための問い①（理解確認課題），理解したことを活用し，深化させるための問い②（理解深化課題）を柱に構成した。さらに終末場面では，授業で学んだ過去と今に生きる生徒自身をつなぐ問い③（振り返りの問い）を思考させることを基本とした。例えば，以下の通りである。

問い①　なぜ，日本はアメリカと戦うことになったのだろうか。（理解確認）
問い②　太平洋戦争へと向かうターニングポイントとなったできごとは何だろうか。（理解深化）
問い③　戦争を防ぐためには，どのようなことが大切なのだろうか。（振り返り）

主題名「太平洋戦争」（本実践６時間目）での問いの構成

上記のような問い①～③の追究を通して，習得した個別の知識が互いにどのような時間的・空間的な関係性をもっているのか，あるいはそれらが全体として，戦争に向かったという時代状況をどのように形成しているのかが十分に理解できるよう工夫した。このことにより，生徒が持続可能性への思考を価値として認識できると考えた。また，各時間の導入時には，関連する現代の課題を提示することにより，各時間に学ぶ過去と今に生きる生徒自身をつなぐとともに，本単元で習得した知識や概念を持続可能な社会の形成に資するものに拡大させることができると考えた。

（Ⅱ）「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実

ア　すべての生徒が学び合える効果的な学習形態の工夫

生徒が互いに顔を見合いながら，また，思考の状況を確認し合いながら，学習を進められるよう，各授業の前半部はコの字型の座席配置による全体学習を中心に進めた。その際，適宜ペア学習を取り入れ，互いの意見を聞き合いながら考えを練り合い，発表する場面を設けた。授業の後半部では，問い②について，グループで練り合い高め合う場面を設けた。各自の考えを基にしてグループ学習を進めさせることにより，すべての生徒が自分の考えを広げたり深めたりできると考えた。コの字型の座席配置やペア及びグループ学習の最大の利点は，言語情報のみならず非言語情報（表情やしぐさなど）をも，互いに確認し合いながら生徒の学び合いが成される点にある。自分の思考・判断の過程や成果が，他者にどのように伝わっているのかをリアルタイムで認識できる状況での学びこそが，自尊感情を醸成し合う「きょうどう」の精神を発揮する学びには欠かせないものであると考えた。

イ　他者からの学びを促進する手立ての工夫

コの字型の学習形態/ホワイトボードの活用

問い①の追究場面においては，理解している生徒が，理解が不十分な生徒に対して，納得するように工夫して説明させたり，理解が不十分な生徒が，何とか理解しようという意識で他者の説明を聞かせるといった，「共同」の精神を発揮する学びを構成した。問い②の追究場面においては，お互いに納得するまで話し合わせる中で，当時の社会状況についての見方や考え方がより社会的に育つことを意図して「協同」の学びを構成した。つまり，本実践における「共同」の学びとは，共に同じ結論に至るよう努力し合う学び合いを指し，「協同」の学びとは，他者と協力して自分も相手も納得できる「よりよい」解や解釈を導き出す過程における学びを指す。これらにおいては，問答ゲームやスピーチの型を活用しながら，意見交換をさせたり，意見カードやホワイトボードを活用して，個人やペアでまとめた意見を，適宜小集団や全体に提示させながら学習を進めた。これにより，各個人の論理的な思考を促すとともに，効率的に多様な考えに触れさせることができ，「きょうどう」の学びが促進されると考えたからである。

（Ⅲ）　資質・能力が育つ評価の工夫

ア　「逆向き設計論」に基づく指導計画や評価計画の立案

研究テーマを具現化を念頭に，本単元の構想を立案するに際して「逆向き設計」論に基づくテンプレート（次頁）に活用した。このテンプレートを基にして，本単元における「本質的な問い」と「永続的な理解」を構想し，評価計画及び指導計画を立案した（P　　参照)。「逆向き設計」論は、カリキュラム設計に当たって、教育目標、評価方法、学習経験と指導を三位一体のものとして設計することを提案するものである。「逆向き」と呼ばれる所以は、中学校での教育によって最終的にもたらされる成果から翻って教育を設計する点にあり、通常、指導が行われた後で考えられがちな評価方法を先に構想する点にある（西岡加名恵氏)。この「逆向き設計」論に基づく指導計画を立案することにより、長期的な視野に立って、「よいよい社会や自分の姿を思い描く力」及び「事象や問題の背景を熟考し，自分の意見や考えをもち表現する力」の育成に確かに迫る単元の学びを目指した。

イ　単元の学びを包括できるパフォーマンス課題及びルーブリックの検討

生徒の実態や教師の教材観・指導観に基づき，パフォーマンス課題を設定した（P　　参照)。このパフォーマンス課題の追究やその前段階として作成・活用した模擬シンポジウムのスピーチは，生徒の確かな社会認識が育つとともに，それに基づきこれからの「よりよい社会や自分」を志向することに直結するものであると考えた。また、本パフォーマンス課題の設定に際して留意したことは、パフォーマンス課題の追究において、、「よいよい社会や自分の姿を思い描く力」及び「事象や問題の背景を熟考し，自分の意見や考えをもち表現する力」の育成に「論理的思考力が発揮されるものであること」「資料収集力が必要とされるもの」「多面的で個性豊かな表現が引き出されること」「単元の学びの意義を感じさせるものであること」である。これらのことに留意して、パフォーマンス課題の「目的」・「役割」・「相手」・「状況」・「観点」を以下の通り設定した

○何がパフォーマンスの目的かー「戦争の原因を明らかにし、予防策を提言する」
○学習者が担う役割は何かー「平和を守るための調査研究をしている政治学者」
○誰が相手かー「平和を求める世界の人々」
○想定される状況は何か―「第二次世界大戦後の国際シンポジウム」
○生み出すべき作品は何か―「提言レポート　Ｂ４版１枚」
○評価の観点は何かー因果関係を捉える思考力　　多彩な資料を適切に活用する力

なお，このパフォーマンス課題におけるルーブリックは，（P10）の通りである。

逆向き設計テンプレート

教科領域名 社会　　指導者　宮本 真人

(a)研究テーマ(育成したい持続可能な社会を支える資質・能力)
よりよい社会や自分の姿を思い描く力の育成

(b)教科領域で育成すべき「論理的に思考し表現する力」
事象や問題の背景を熟考して自分の意見や考えをもち、その根拠を明確にして表現する力
※熟考・・・時間的・空間的な視野をもって、多面的・多角的に考察すること

単元名: 近代の日本と世界(カ) なぜ、日本人は再び戦争へと向かったのか (3年)　　時数:全10時間

実施時期:平成28年5月下順

第一段階:求められている結果

本単元(1学期)における設定されている目標:　【G】goals

(a) 研究テーマに対して:

平和で民主的な持続可能な社会の実現に主体的に参画することが大切であることに気付く。

(b)「論理的に思考し表現する力」に対して:

様々な資料を活用して、第二次世界大戦の原因と人々に及ぼした惨禍について熟考し、他者に分かりやすく説明できる。

理解: 【U】understanding	本質的な問い: 【Q】questions
第2次世界大戦が、ベルサイユ体制のもとでの植民地支配の継続、民族至上主義による他民族の迫害、世界恐慌からくる経済的社会不安、仮想敵国を同盟や条約が複雑に結び付いて起こった。それは現代の国際関係にも影響を及ぼしている。私たち一人ひとりが、国際協調と国際平和の実現を希求し、全世界の人々が平和に生きることのできる持続可能な社会の実現に主体的に参画することが大切である。	なぜ、戦争は起こるのか。 どうすれば戦争は防げるのか

生徒は次のことを知る 【k】knowledge	生徒は次のことができるようになる 【S】skills(a)
この時期の、 ・経済の世界的な混乱と社会問題の発生及び社会不安の広がり ・我が国の政治・外交の動き、中国などアジア諸国との関係 ・欧米諸国の動き ・戦時下の我が国の国民生活 ・第二次世界大戦、太平洋戦争が現代に及ぼす影響 について理解する。	(a)について ・なぜ、戦争は起こるのかについて、興味や関心をもつ。 ・国際協調と国際平和の実現を求めるようになる。 ・全世界の人々が等しく恐怖と欠乏から免れた持続可能な社会の実現に主体的に参画しようとする意識をもつことができる。 ・歴史的事象を根拠にした、戦争を防ぐための手段について、自分の考えをもつことができる。

生徒は次のことができるようになる　【S】skills(b)

(b)について

・第一次世界大戦、日中戦争、太平洋戦争までの経過を追究し、その比較や関連付け、総合などを通して、戦争が起こった原因について多面的・多角的に考察できる。

第2段階:評価のための証拠

(a)に対して 【T】tasks (a)	他の根拠 【OE】other evidence(a)
パフォーマンス課題:あなたは、平和をまもるための調査や研究をしている政治学者です。1951年の国際会議に参加することになりました。そこで「なぜ、戦争は起きたのか、どうすれば防ぐことができるのか」についてスピーチを行うことになりました。この時期の世界の首脳が納得できるスピーチ原稿を作成しなさい。	・「世界恐慌に対する、各国の対応についての問題点」の記述 ・「戦争を防ぐためにはどのようなことが大切かについて話し合い、自分の考えをまとめよう」についての考察

(b)に対して 【T】tasks (b)	他の根拠 【OE】other evidence
・「なぜ、世界恐慌で各国の対応は異なったのか」 ・「なぜ、日本と中国の関係は変化したのか ・「なぜ、日本人は再び戦争に向かったのか」 ・「なぜ、太平洋戦争が『明るい』などと表現されたのか」 これらの問いについて、様々資料を根拠に熟考し、その追求の過程や結果を他者に分かりやすく表現しよう。	・模擬国際シンポジウムでのスピーチ原稿、討論の様子 ・太平洋戦争へと向かうターニングポイントの考察

第3段階 学習計画

1 学習問題「なぜ日本人は再び戦争に向かったのか」について予想をもつ
2 世界恐慌に対する各国の対策について調べ、その背景を追究し、問題点をまとめる。
3 日中経緯に至る経緯について調べ、他者に説明する。
4 日中戦争が中国や朝鮮、日本の人々にどのような影響を及ぼしたかについて調べまとめる。
5 第2次世界大戦や太平洋戦争の原因や経過を捉える。
6 日米開戦までの経緯を振り返り、戦争を回避できた時点を判断する。
7 戦争による国民生活の変化について調べる。戦争が現代に及ぼす影響について考察する。
8 学習を振り返り、学習問題について考察し、発表し合う
9 模擬国際シンポジウムでスピーチや意見交換を行う。
10 パフォーマンス課題についてまとめる。

イ　生徒の学びの実際（６／10時間）

（ア）主　題　　太平洋戦争へと向かうターニングポイントを捉えよう

（イ）ねらい

○日本の南進政策が太平洋戦争の要因となったことを理解する。

○戦争を回避できた時点を自分なりに判断し、その理由を根拠を上げて説明する。

（ウ）展　開

学習活動（形態）	時間	○教師の働きかけ　・生徒の反応	○指導の工夫　◇評価（方法）
1　日米開戦に踏み切った政治担当者の思いを知る。 （一斉）	5	○子どもが戦争に参加したり、テロを起こしたりするのには、どんな理由があるのだろうか。 ・宗教や政治の対立 ・貧困からの脱却 ○山本五十六は、何を守るために日米開戦に踏み切ったのだろうか。 ・日本人の安定した暮らし ・日本の国際的地位	○歴史を学ぶ意味を感じさせるため，本時の学習内容と結び付く現代の社会的事象を取り上げた。 ○当時の日本の状況に思考を及ぼさせるため、山本五十六の言葉を映像を活用して紹介した。
問い①理解確認課題	なぜ、日本はアメリカと戦うことになったのだろうか		
2　問い①について考察し、学級全体で結論を導く。 （個人） →（ペア） →（全体）	10	・援蒋ルートを断ち切り、日中戦争や南進政策を有利に進めようとしたから ・アメリカを中心とするＡＢＣＤ包囲陣を打ち破るため	**○日米開戦の背景を全員に納得させるために、ホワイトボードやコの字型の座席の利点を活かした。【共同】** ◇日本の「南進政策」をキーワードに説明をまとめている。 （ワークシート）
問い②理解深化課題	太平洋戦争へと向かうターニングポイントとなったできごとは何だろうか		
3　問い②について判断したことをもとに話し合う。　【協同】 （個人） ↓ （小集団） ↓ （全体）	18	結論 ・私は満州事変だと考えます。 理由・根拠 満州事変を契機に、軍部の政治的発言力が増大し、日本は中国侵略を押し進めた。このことが日米対立の要因となっているからです。	**○自他の異同を明確にしながら論理的に思考し表現する学び合いを促進させるため、班で結論を一つにまとめさせる際、全員に問答ゲームの型で表現させた。【協同】** ◇当時の社会状況を踏まえた上で，問い②について自分なりに判断し，根拠を挙げて説明している。（ワークシート）
4　当時の在るべき日本の姿を構想する。 （小集団） ↓ （全体）	10	○日本はその時どうすればよかったのだろうか。 ・国民が軍部に反対する世論を形成すればよかった。 ・第３次護憲運動のようなものを展開すればよかった。	**○当時の状況を踏まえて、論理的に思考させるために一分間スピーチの型で思考させ表現し合わせた。【協同】**
問い③振り返り	戦争を防ぐためにはどのようなことが大切なのだろうか		
5　本時の学びを振り返る。 （個人）	7	○本時の学びを踏まえて、現代社会で起こる戦争や紛争を防ぐためにはどのようなことが大切なのかまとめよう。	○本時の学びが現代の社会への理解　につながるよう，また、自己の成　長を認知できるよう、本時の学び　から根拠を見いださせた。

ウ　考察

（Ⅰ）問題解決的な学習の充実

授業参観者（第６時間目を参観）より

○単元の学習問題が設定されているので、見通しをもって学習が進められている。本時のみならず、各次の理解深化課題の追究が、自ずと単元の学習問題の解決に迫ることのできる問いの構成になっていると考えられる。現代及び未来の社会認識を形成する意味では、導入時に本時に関連する現代社会の課題を提示することは効果的であると考える。

○単元を貫く学習問題が示されているので、本時の問いの追究について十分な知識をもって、それを活用しながら追究できていた。

○授業において、生徒の発言に対して、「なぜ？」「つまり？」「例えば？」などと効果的に教師が働きかけていたため、論理的に時間的・空間的な認識のもと論理的に思考することができており、生徒の考えをさらに深めていく（よりよい未来づくりに活かせる歴史認識の形成につなげる）ことができていた。

○導入から展開に至るまで、発問方法、テンポ、生徒の発言の取り上げ方など、思考を広げたり深めたりすることに効果的であった。また、「歴史」を学ぶことにより現代や未来について考える生徒の姿が印象的であった。日頃の積み重ねの成果を感じる。

生徒のアンケートより（以下の数値は生徒78名の平均値を示す。５段階評価最高値５）

項目①単元を通して、自ら意欲をもって積極的に授業に取り組んだ（4.65）
項目②単元の学びは、とても興味の引く学習内容であった（4.42）
項目③日本がなぜ、再び戦争をしたのかだいたい分かった。(4.57)
項目④単元の学びからから私たちの社会に活かすべきことが見いだせた（4.59）
※項目①～④において評価を「２」以下とした生徒はいなかった。

参観者の意見生徒アンケート及びワークシートの記述から「時代の特色の理解や現代認識」のみならず「持続可能な未来構想」につながる、問題解決的な学習が展開できたと判断している。また、昨年度、課題として掲げた教師のコーディネートについても、研究のねらいに迫る観点から、生徒の意見をコーディネートできていたと判断できる。

（Ⅱ）「きょうどう」の精神を発揮する学び合いの充実

授業参観者（第６時間目を参観）より

○問答ゲームやスピーチの型を使って個人が問いに迫っていくことについては、大変効果があったと思う。特に問答ゲームやスピーチの前にとった個人での思考の時間（１分間）にて、要点となる根拠を選択して論理的に思考し表現することができていた。

○４人グループのうちの二人が問答ゲームを行って、もう二人がそれを見ておく小集団学習の手法は、よりよい表現に練り上げたり、見方や考え方を広げたり深めたりするのに効果が高いと感じた。

○ホワイトボードをうまく活用してペア活動やグループ学習が効果的になされていた。それぞれの問いの質に応じた学習形態により、質の高い学び合いが進められていた。

●問答ゲームの際に相手の考えを引き出そうとしているか疑問に感じる質問者もいた。相手の話したことを相手や他者にフィードバックする機会を入れるとより、ペアでの対話が充実すると感じた。

●問答ゲームにおいては質問者の力量がその活動自体の質を大きく左右させる。質問者側の力量を高めることはもちろんのこと、話合いの視点や役割を明確にすることも大切であろう。また、他のペアの問答ゲームを聞き取る際にも、聞き取る際の視点を明確にしたほうがよい。その視点の持たせ方により、論理的のみならず批判的思考力や創造的思考力の育成にも発展していくと感じた。

生徒のアンケートより（第２、４、６時のアンケートの対象クラス全員の平均値）

項目⑦この時間の、他者との関わり合いは楽しかった。(4.68)
項目⑤この時間に、友達との関わり合いの中から自分の成長に役立つ学びを得た（4.75）
※項目⑤・⑥において評価を「３」以下とした生徒はいなかった。

コの字型の学習形態、ペアやグループでの学習は、生徒から「できるだけ多く」との要望が多く、生徒はこれらの楽しさも有用性も感じている。今後もこれらの活動を継続して取り入れ、すべての生徒が他者とともに学ぶ楽しさを味わい，個々の学びを深め，そして「すべての生徒が伸びる」ことのできる「きょうどう」の精神を発揮する学びをデザインしていきたい。また、問答ゲームやパラグラフにスピーチの型を活用させたことも、「論理的に思考し表現する」ことに有効であった。

（Ⅲ）資質・能力を高める評価の工夫

本単元の終末で取り組ませたパフォーマンス課題についての成果物（下）を次ページのルーブリックに従って評価した。二つの観点についてCと評価せざるを得ない生徒（３名）が存在することが大きな課題としてあげられる。これらの生徒は、パフォーマンス課題のみならず、各授業において、一つの資料中の解説等をそのまま自分の言葉として論述している場面が多く見られる傾向があることが分かった。つまり、単元を貫く学習問題を多面的・多角的に追究することができおらず、それが、パフォーマンス課題の取組にも表れたということである。これは、教師が「逆向き設計テンプレート」を作成したものの、「何ができるようになるか」についての指導と評価が十分ではなかったことを意味する。「何ができるようになるか」について、単元を通して指導と評価をさらに充実させ、そこで習得されたものが発揮できるパフォーマンス課題に取り組ませることに留意しなければならない。

なぜ戦争は起きるのか。

～世界の戦争時代に見る原因～

〈戦争の歴史〉

実際、戦争とはどのようなことで起こったのか。まず日本で見てみる。（戦争には、何で起こったのかが（ ）内）

1894年 日清戦争（朝鮮の争奪→領土拡張）
1904年 日露戦争（朝鮮支配をめぐる）
1914年 第一次世界大戦（バルカン半島をめぐって）
1919年 3・1独立運動
5・4運動（パリ講和条約の改正）
1925年 治安維持法公布
1929年 世界恐慌
1931年 柳条湖事件、満州事変（満鉄の爆破）
（中国からの満州の分離）→国際連盟脱退
1932年 5・15事件
1936年 2・26事件
1937年 盧溝橋事件→日中戦争
1939年 朝鮮人の皇民化
1941年 台湾で志願兵制度
12月8日 真珠湾攻撃（ABCD包囲陣の打破）
マレー半島襲撃（資源確保）

〈第二次世界大戦に見る〉

第一次世界大戦とは、ドイツ中心の同盟国側と、イギリス中心の連合国側の間に起こった大規模な戦争である。この原因は「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれた「バルカン半島」があったことなどがあげられる。

また、この実際の戦争だけでなく、講和条約からも新たな戦争がはじまることになったのだと私は思った。（古下）

連合国	
ロシア	170万人
フランス	135万8000人
イギリス	90万8000人
イタリア	65万人
アメリカ	11万7000人
日本	300人
同盟国	
ドイツ	117万4000人

▲各国の死亡者数（だいたい）

どうすれば防げるのか。

～今の世界から戦争を起こさない地球へ～

〈第二次世界大戦に見る〉～世界恐慌の中～

①ファシズムの動きに見る戦争（日本）

ファシズムとは、民主主義などを否定する全体主義の政策のこと。日本はファシズムによって自国の利益を優先し、他国を侵略する考えが育ち始め、それを実行（朝鮮侵略、満州国設立など）した日本は世界の中心だった国際連盟をも脱退し、国際的孤立も深めた。そして考えを改めればよかったけど、そのまま突き進み、石油まで止められ対米BCD包囲陣これによって太平洋戦争に発展する。

②ブロック経済から見る戦争

ブロック経済とは植民地を関係を密接し、他の国のは関税を高くする経済のこと。不況を立て直す政策。一見戦争とは関係ないように見えるが、この政策をとれるのは植民地がある国だけ。パリ講和条約が植民地を手放した国は当然この政策に不満をもつ。ちなみにドイツはこの時ファシズムをとり、ベルサイユ条約を破棄、軍備の増強を行い、戦争へ向かっていた。

枢軸国	日本	ドイツ	イタリア
	230万人＋80万人	400万人＋300万人	30万人＋15万人

連合国	ソ連	イギリス	アメリカ	フランス	ポーランド
	1360万人＋700万人	45万人＋37万人	29万人	200万人＋140万人	28万人＋561万人

▲各国の死亡者数（だいたい）※太字は兵数

〈結論、戦争が起こる理由〉

前のまとめを見ていくと、結局戦争は経済の発展や土地をめぐる争い、思想の違いなどが起こったのである。

〈じゃあ、どうすればいいのか。〉

世界を統一して、言語も民族も1つにしてしまう！というのが一番早いのかもしれないが、それもいやだ。では、どうすれば良いのか。まず、お互いの国の考え方を理解し、受け入れること。国が違うのだから、考え方や思想が違うのは仕方がない。大事なのはそれをどう受け入れるか、である。たとえその考えに賛成できなくとも、すぐに"戦争"という形で判断を下そうとせず、話し合いで解決することが大事なのである。

話し合いで失うものは無い。たった1つのことのために何この人、物を失うのは、あまりにも無意味すぎるのではないだろうか。

パフォーマンス課題についてまとめた生徒Ａの提言レポート

課題：「なぜ，戦争は起きるのか？ どうすれば防げるのか？ 」について提言するレポートの作成			
評価	A	B	C
関心意欲態度	国際協調が大切であるとの認識をもって，学んだことを根拠にして，自分の考えを明確に主張している。	国際協調の大切さを，調べたことを活かして記述している。	国際協調の精神を基にした主張が書かれていない。
人数	６８	１０	0
思考判断表現	課題について，時間的及び空間的にな視点をもって収集された資料を基に，政治，経済，文化などから複数の構成要素を総合的に関連づけて分析し，具体的な根拠を挙げて説得力のある主張を組み立てている。	課題について，時間的・空間的な視点をもって，政治，経済，文化などから二つ以上の構成要素を関連付けつつ分析し，具体的な根拠を挙げて明確な主張を述べている。	何らかの根拠に基づきレポートを作成しているが，捉えられている構成要素が，一面的なものにとどまっている。 根拠があいまいな主張がレポートの中心となっている。 情報の羅列に終わっている。
人数	３０	４５	3
資料活用	主張に適した多様な資料を複数選択し，多角的に関連付けて論述の根拠としている。	主張に適した複数の資料を選択し，それらがすべて論述の根拠として活かされている。	基本的な資料を読み取ってはいるが，主張の根拠として成り立っていない。
人数	３８	３８	2

本単元のパフォーマンス課題に係るルーブリック（※上記の人数は，生徒78名の状況である。）

４　成果と課題

パフォーマンス課題の「興味・関心・態度」の観点について、全員の生徒がＢ評価以上であったことから、ＥＳＤを踏まえた学習内容とともに、毎次の導入時に関連する現代の社会的事象を取り上げたり，振り返りの問いにて、学んだことを活かしながら現代や未来について考えさせたりしたことは、「よりよい社会や自分を志向」することに有効に働いたと判断できる。学習感想等からも、生徒が持続可能性への志向を価値として認識している様子が確認できた。また、自他の思考を可視化して話合い活動等を行わせた結果、充実した学び合いがなされ、生徒それぞれが、多面的・多角的に思考を拡大させていく様子が確認できた。そこでは、言語技術教育の手法を活用したことが大変有効に働いていた。パフォーマンス課題の追究については77名（調査対象78名）の生徒が「面白かった、やや面白かった」としており、パフォーマンス課題の質やそこに向かわせる過程もおおむね適当であったと判断する。今後，本研究での実践をさらに充実させ、生徒が様々な視点から時間的・空間的なものとの対比や関連において、自分や社会を見つめ直すことのできる歴史学習を積み重ねさせていきたい。

「思考・判断・表現」や「資料活用」の観点でＣ評価の生徒に対する指導と評価が十分でなかったことついて、これらの生徒はすべて社会科を苦手と回答している生徒であった（４月実施アンケート調査より)。「教育のユニバーサルデザイン」の観点からアプローチすることはもとより,「きょうどう」の学びをさらに充実させなければならないことを痛感している。このためには、特に、理解できていない学習者が上手に質問できるようになることが大切だと考える。理解できていない学習者が上手な質問をすることは，教える側にとっても教わる側にとっても双方の理解が深まることが認知心理学の研究で明らかにされている。また、上手な質問とは「なぜ」や「しくみ」に関わる質問であることも明らかにされている。これらを踏まえ，社会的事象の意味や意義を理解しようとする発想をもたせること、学校全体での取組を活かしながら、社会科の授業においても６Ｗ１Ｈ等を使いこなす技能を身に着けさせること
を特に意識して今後の指導に当たりたい。

参考文献

猪瀬直樹（2002)「日本人はなぜ戦争をしたか―昭和16年夏の敗戦」小学館
ＮＨＫ取材班（2011)「日本人はなぜ戦争へと向かったのか（上・下）ＮＨＫ出版
加藤陽子（2011)「さかのぼり日本史『とめられなかった戦争』」ＮＨＫ出版
市川伸一（2012)「教えて考えさせる授業 中学校」図書文化
佐藤　学（2012)「学校見聞録　学びの共同体の実践」小学館
西岡加名恵（2016)「教科と総合学習のカリキュラム設計」図書文化